

9) 過去35年間の新制東京歯科大学校地・建物の変遷について

The Changes of the School-site and Building of the Tokyo Dental College in the Past 35 Years

東京歯科大学 ○山岸東太郎
森山 徳長
石川 達也
長谷川正康

Totaro Yamagishi, Norinaga Moriyama,
Tatsuya Ishikawa and Masayasu Hasegawa,
Tokyo Dental College

明治23年開学から昭和33年までの校地・校舎については、第18～第20回日本歯科医史学会に報告した。今回は、昭和34年以降、100周年を越えて現在までの校地校舎の変遷について報告する。この期間の校地・校舎の拡充を、2期に分けることができる。1) 昭和34年から昭和56年の千葉校舎完成までと、2) 昭和57年以降、100周年を越えて現在までの時期である。

1) 昭和34年から昭和56年の千葉校舎完成まで
昭和33年までに、大学院の整備がなされ、大学の形態が整ったのである。昭和34年以降は、関連施設である市川総合病院の整備、充実のため、昭和47年まで7回にわたり隣接地を購入し、その間病棟も増床された。昭和45年には、基礎研究等の充実を期して、解剖別館が新築された。一応この時点での大学の整備はなされたものの、将来の大学の教育・研究・診療の発展を考えると水道橋校舎は手狭になると予想され、学校法人は、熟慮の末昭和48年6月に将来構想を含めて千葉市美浜区真砂に約30,000坪の土地を購入した。大学の土地は、この時点で約50,000坪となった。地域医療の観点から、千葉市に購入した土地に、稲毛歯科診療所を開設した。診療所は、昭和56年の千葉校舎・病院が完成し、千葉病院開院の前日昭和56年8月31日まで、地域医療に貢献し、同日付けで閉鎖された。無事、千葉病院のパイロット役を果たしたのである。

2) 昭和57年以降、100周年を越えて現在まで
昭和56年9月に、新装なった千葉校舎、千葉病院が開院し、これで水道橋校舎、市川総合病院の3キャンパスとなり、次代への発展の基盤ができたのである。千葉校舎は、建坪5,206.9坪、延床面積15,663.9坪であり、歯科の単科大学としては、その規模において一等地を抜くものである。設備は近代化され、教育、研究、診療の飛躍が望まれ、期待にそぐわない発展をしてきた。昭和58年には、千葉校舎は建築業協会賞を受賞した。

また、旧水道橋校舎の再開発が検討され、昭和62年に水道橋校舎起工式が行われ、100周年を迎えた平成2年3月に完成し、水道橋校舎として、水道橋病院と賃貸ビルのインテリジェントビルとして再出発した。平成2年1月には、千葉市御殿町にグラウンド用地として9,671坪を購入し、平成3年3月に野球場として御殿町グラウンドが完成した。この時点での大学の土地所有面積は、約60,000坪となった。さらに、市川総合病院も次への新たな展開を目指して、平成4年7月に装いも新たに、建坪2,627坪、延床面積9,005坪の新市川総合病院として新たな出発をした。単科大学としては世界に類例を見ない付属総合病院であり、本学学生の隣接医学の場として、また地域医療への貢献が在来以上に期待され、それに応える設備となっている。

3) おわりに

大学が100周年を迎えるにあたり、21世紀の未来を見ずして、その10年前から大学の将来の発展を期して、過大ともいえる建物、土地への投資を行ってきた。この10年間にける勇気ある挑戦は、将来の歯科大学の発展に寄与することは間違いがないし、現在言われている大学の自己点検・評価につながり、3キャンパスのハード面の基礎ができた。これら3キャンパスの連携により、教育、研究、診療の更なる充実がなされることが期待される。